

モンゴルの現場からの報告 第2弾

日本語による主権者教育の取り組み —市議会議員へのインタビューを通じて—

渡辺 真由子 (名古屋大学大学院法学研究科)
伊藤頼子 (名古屋大学日本法教育研究センター)

1. モンゴルと選挙

日本では、選挙権年齢が18歳に引き下げられたことを契機に、若者の選挙への関心を高める動きや主権者であるという自覚を持たせる主権者教育が高校などで盛んになってきています。

モンゴルでも12年生(高校3年生に相当)になると「市民教育(Иргэний боловсрол)」という授業で、選挙によってどのように政治に関われるのかなどを学びます。

しかし、若者の政治への関心が高いかという点と日本同様、投票率は低下し続けています。民主化直後の1992年に行われた国会議員選挙では95.6%あった投票率が、2016年の選挙では72.1%となっており、これからのモンゴルを担う若い世代に政治への関心を持ってもらうことがモンゴルにおいても課題となっているようです。

2. 主権者教育を取り入れたプロジェクトワーク

筆者らは、モンゴルの首都ウランバートルにある大学の法学部で日本語を教えています。ここで日本語を学んでいる学生たちの多くは、大学を卒業すると弁護士や裁判官といった法曹の道に進みます。中には、法学者になって母国の法整備に寄与したい、大統領になって国を変えたいという熱い想いを持った学生もいます。そんな学生たちに主権者としての自覚や社会・政治への関心をもっと持ってほしいと考え、学部2年生(日本語能力はJLPT N3レベル)を対象として、モンゴル・日本両国の市議会議員にモンゴルが抱える問題について投げかけ、レポートにまとめるというプロジェクトワークを行いました。

3. プロジェクトワークの概要

本実践は、気候や食生活といった日本事情全般について学ぶ「日本事情」と、四技能を用いた自律学習を行う「日本語総合」の授業を連携し、2017年11月～12月に以下のスケジュールで実施しました。

第1回(日本事情)	・グループを決める
第2回(日本語総合)	・インタビュー時のマナーと話し方
第3回(日本事情)	・議会について学ぶ ・質問を考える
第4回(日本語総合)	・レポートの書き方
第5回 インタビュー後	・インタビュー実施 ・レポート提出

第1回授業で、4名×4グループ(ワークライフバランス、教育問題、ごみ問題、大気汚染)に分かれたものの、第2回授業でウランバートルの市政がどのように実施されているかを聞くと、市議会があることも知らない学生もおり、市議会議員がどのような仕事をしているかについてもはっきりと答えられる学生はいませんでした。

そこで第3回授業では市議会や市議会議員の仕事について学習し、それをふまえて質問を考えることにしました。はじめは漠然とした質問しか考えつかなかった学生たちですが、第3回授業からインタビューが実施されるまでの9日間、どのような課題が潜んでいるのかを調査しに図書館に話を聞きに行ったり、大気汚染についてウランバートル市民にアンケート調査をとったりするなど、それぞれのグループが、市政がどのように市民生活と関わっているのかを自発的に学び、理解を深めていきました。

そして迎えたインタビュー当日。協力してくださったのは、ウランバートル市議会所属のT

氏と三重県四日市市議会所属のH氏です。日本留学経験があるT氏には日本語で対応に応じていただくようお願いし、H氏には、インターネット電話サービスを用いて日本から参加していただき、T氏・H氏・学生の三者間で三方向の意見交換ができるようにしました。



インタビューの様子

学生はウランバートル市が抱える問題や課題に対して今後どのように取り組むべきか、四日市市にも同様の問題があるのか、あるとしたらどのように対処しているのかといった質問や疑問を議員に投げかけました。

(1) ウランバートルの図書館に関する問題

学生：郊外に住んでいる人のために、休止している移動図書館を再開すべきではないですか

学生：雨漏りや暖房器具の故障などで快適に図書館を利用できません。

⇒議員：一年間のコストを考えたら、移動図書館を再開させるより新しい図書館を作るべきだと考えています。まずは今年度予算で図書館を修繕する予定です。(T氏)

⇒議員：四日市の図書館も古くなってきていて、町の中心に移転させようという意見もありますが、津波の心配もあり、移転には反対意見も出ています。(H氏)

(2) モンゴルにおけるクラブ活動の是非

学生：子どもの能力を伸ばすため、市がスポーツのクラブを運営する必要があるのではないのでしょうか。

⇒議員：現在の教育システム¹では、午前も午後

も授業が入っていて難しいですが、市がクラブをつくるというのはいいい考えですね。(T氏)

⇒議員：日本のクラブは、学校の先生が教えているので、先生たちの仕事量が多くなりすぎてしまうのが問題になっています。(H氏)

(3) 大気汚染対策

学生：ウランバートル市は大気汚染を減らすためにどのような取り組みをしていますか。四日市市では、公害問題を解決する際に外国の事例を参考にしましたか。

⇒議員：自分の選挙区にある300世帯にセントラルヒーティングを結びました。また、石炭の使用を軽減させるために電気ストーブの貸与も検討しています²。(T氏)

⇒議員：四日市市では、公害問題を乗り越えた経験をもとに博物館を作りました。タイやベトナムからも学びに来てくれているので、モンゴルからも学びに来てほしいです。(H氏)

4. プロジェクトワークを終えて

後に提出したレポートでは、ある学生は大気汚染について「いつも帰る時、こんな重い問題をどうやってなくしたらいいか考えていた」と述べ、ある学生はモンゴルが先進国になる可能性を示唆し、それは「モンゴルのため自分のできることをしているTさんのような人が多くいる」からだと述べました。このようにプロジェクトワークの過程で小さな変化や問題に目を向け、どうすれば解決するかを考えることで、一人一人が主権者であるという自覚と認識につながったように思います。



真剣な表情で議員の話を聞く学生たち

注

- 1 現在、ウランバートル市内の公立初中等学校では、児童過多により午前と午後の二部制授業（一部ではさらに三部制となっている）を採用している。
- 2 モンゴルでは、火力発電所のボイラーで沸かされたお湯を配管によって市内の各建物・各家庭に供給するという暖房システムが採用されているが、一部の地区ではこの暖房システム未整備のため、石炭ストーブが使用されている。

参考文献

- (1) 文部科学省（2016）『主権者教育の取り組み』<http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/1369165.htm>
（2018年1月17日アクセス）